

現在の同盟内分派斗争、党内斗争をいかにとらえ、此場

— 関西地方委員会の意見 — 専断

7月6日に発展し、現任となお統一している同盟内分派斗争、党内斗争をいかにとらえ止揚すべきかについて、同盟中央及び各地方委員会の諸同志に対して、関西地方委員

会として一致した意見をここに表明したいと考ふる。
現任、わが同盟の状態は、赤軍派による分派斗争の展開が党派斗争へと発展する可能性を併せて進んでおり、一方共産主義を維持して活動している諸同志の間でも主に二つのフラインジョンが形成され党内斗争が展開されている状態だと考ふる。この分派斗争、党内斗争は決して偶然に発生したものでなく、歴史的、階級的に深い根柢を併せており、日本階級斗争の最前線に立って反帝統一戦線を領導し抜いてきたわが同盟であるから、と、たにかわすことの出来ていないものなのである。確かに一方ではこの向の事態の至適は、我々の組織的未熟さを様々なかたちで露呈した、Gや叔長の不考慮に至った至適は、諸同志の向の不信や憎みを形成し、また相互の共産主義者としての思想的根柢にまで、かのぼって争われるような対立をも形成している。しかし、まさになぜこのような深刻な対立が発生しているのかということこそ、我々が分析しなくてはならないのであり、この向魁の解明を回避することによって、我々の党建設は一歩たりとも前進しないであろう。

なぜなら、我々が秋好保決戦を目前にこの向われていることは、7回大公以来、同盟が獲得してきた全この政治、組織理論、及び政治、組織的実践の飛躍であり、なかく、同盟そのものの革命であるからである。そしてこの「飛躍」「革命」は単に日本階級斗争の枠内でのものではなく、近代プロレタリアートの形成とマルクスによる共産主義運動の開始、あるいはレーニンによるロシア労働者階級の樹立と第三インターの形成といった内容と同質の、国際共産主義運動史上の位置を持つた「飛躍」と「革命」への接近であることを知らなくてはならない。すなわち、世界を口独め、す世界革命戦争への発展を射程においた佐野市田主義政府打倒斗争の開始であり、世界党、世界赤軍の建設を可能とする条件としての世界革命綱領の確定である。そして世界党、世界赤軍の負をもつて、党と軍を組織することである。我々は7回大公路線によつて、この飛躍への一歩を踏みだしたのであり、現任、7回大公の限界を越えることによつて、飛躍の二歩を完成させなくてはならぬのである。我々は、我々が過去受け入れ

てきたマルクス・レーニン主義の教義や理論及び各人の政治リアリズムに頼ることをやめなくてはならない。新しい酒は古い皮袋に入れることはできない。従来の同盟の事情に依拠して発想することによっては何事をも解決しない。同盟を形成してきた諸個人すべての革命家としての思想性がふるいにかけられているのであり、誰も水自らを絶対化することはできない。このようなき、感情や習慣、政治的恩恵から行動することは自らの古い体質に固執することになるであろうし、現任あるがままの我々の党組織を前提にして、その擁護、批判、反批判をくりかえすことによつては歴史を要請し、世界階級斗争の現段階を要請している同盟の飛躍という課題の前に謙虚でかくはならない。自己批判と相互批判を要求されている奥において組織上の上部、下部の区別はなく、すべての同盟員が真剣に党内斗争、分派斗争の展開に参加することによって、わが同盟は現代革命を荷いうる党へと自らを鍛え上げることが出来るのである。いまだちに別党コースをとるものは、以上の課題に答えようことのないのであり、自ら及びわが同盟のみならず日本の革命的左翼線体の政治的未熟さを苛酷に解決しようとするものである。処亦その他の組織的知識をとする場合も、以上の事業の一環、あるいは結果として行われて始めて意味を持つてであろう。

関西地方委員会はこのような立場に立、た上で、この向の政治局の組織指下について、(1)赤軍派指下部の組織路線について、(2)日本共産党の組織の二線にわたつて意見を述べたいと考ふる。

(1)この向の政治局の組織指下について
今回の事態がもたらされた直接的な契機は、4、28斗争の重い経験を経た後、5月5日、6日のろ中委とその維持審議とにある。ろ中委議案は7回、8回大公以降の同盟の到達点と限界のメルクマールとなるのである。にもかかわらず、以降の党内斗争はろ中委議案の総括の上に立って争われることなく、継続ろ中委の両儀のなま、7月6日のろに至った。この向の党内斗争の思政府性手工業の原因の一つはここににあるのである。だから今回の事態及び政治局の組織指下を分析しようとする場合、まず、ろ中委議案の分析から出発しなければならぬ。
ろ中委議案は「4、28斗争が党組織的に同盟に突きつけた向魁は、いかなる革命形態がいかなる党組織論を要請するのかわかるといふ問題であった。」と、7回大公の限界を、「戦略的に党の型範が、権力絶と革命形態論を媒介に

されず併置して出された限界性である」と述べ、8回大会に於いても「権力向野を所被斗争は、安保斗争の前面に押し出すことに成功しなからず、革命形態が深化されないと、弱さを残していた」と述べている。そこで4、28斗争の総括を「党としては、引権力性格と中央権力斗争の理論的諸問題を与えたが、世界革命戦争への連統的位置から第四主義権力打倒に至る革命斗争形態を確定した上で中央権力斗争を革命論的に位置づけ返すことの弱さを残していたのである」とし、「佐藤第四主義政府実力打倒」の革命論的位置すの不充分性として提起した。このような総括の手法は相対的に正しいものであり、7回大会以降の同盟の到達点と限界の一面をつかんでいたといえる。すなわち、党組織論の未確立として提起した点も正しかった。しかし、「戦略論に党の型論が、権力論と革命形態論を媒介にされず併置して出された限界性」として述べられるとき、実は戦略論自体が基準としてこの過渡期世界論から規定されたものとして充分なものでなく、過渡期世界論と戦略、戦術の基準として充分に確立されていない点が見逃されてきた。すなわち、我々は、3論文より4中委、あるいは8回大会以降の中委を経て、過渡期世界論を危殆論として、次に立場として展開してきたが、このことによつては現代過渡期世界の運動法則を説明することはできず、結局従来のレーニン第四主義論から規定した戦略、戦術に終始してきたのである。この場合、戦略、戦術として立てられているものは、鋭い現実感覚にもとづいた政治方針としてはあつても、弟仲重田家を管めた世界革命のオシの波の端緒的な開始という現在の情勢の推移の中で動搖せざるをえず、この政治方針に中央集権党一地区党というレーニン主義の党の型論が併置して出された場合、権力論と革命形態論をも最終的に明らかにすることができず、党の手工業性をまぬがれることができないのである。ろ中委はこの向野を過度にながらん解決を革命形態論の追求に求めていたところ限界があらつた。ろ中委提案に於ける革命形態論の追及は以上からして、ろ中委の第四主義の統一に世界革命戦争という提起の深化としてより、一回的のタターン分析に重きを置かれ、「中央権力斗争が現代第四主義へ先行性ブアシズム攻撃の性格をもつた」の基本的な革命斗争形態」とされた。そこで、中委提案を連統的中央権力斗争として、21から11月新米阻止を主い抜き、「佐藤第四主義政府実力打倒」と最後の合法政府として奪り去る」ものとして設定し、「中央権力斗争の先端を担い、計画的戦争戦略を貫徹して武装斗争を展開する組織」として

同盟中央の直轄する突撃隊の建設を、突撃隊の切り開くべしへ戦略部隊をけん引するもの」として行隊組織の建設を、それと併提し、「世界革命戦争と内戦を切り開く中央権力斗争を担う組織」を建設しなければならぬ」とした。これらの提起は4、28斗争の総括として正しい政治的直観にもとづいたものであらつた。しかし向野なのはこのよう政治方針を実現し、党組織を建設してこのよう場所、同盟の決定的な飛躍を、政治、軍事、組織的に向われ、同盟の決定についてふれられていないことである。「連統的中央権力斗争の展開による佐藤第四主義政府の実力打倒」を直に実現しようとするれば、4、28斗争のときとさげす棒、投石、火災ビンの軍事では決定的に不十分であることは明らかではなかつたろうか。そこでこのよう軍事組織するといふことは、まさに攻撃型前級斗争「前級前革命」への接近であり、過渡期世界を攻撃的に変革していく世界革命戦争の一場として、日本前級斗争の飛躍を勝ち取るべき一歩である以上、過渡期世界論を危殆論として、あるいは立場として把握してきた従来の同盟の政治的結果としては決定的に不十分であり、世界革命戦争の戦略、戦術を規定する基準として過渡期世界論が確定されねばならないことは明らかではなかつたろうか。また党の組織体制の上からいへば、この平時から党中央直轄の突撃隊を建設することはレーニンの党の行方なかつたことであり、従来の同盟の組織体制の根本的変革と再組織を実現しなくてはならぬことは明らかではなかつたであろうか。それらの振躍をいかに実現するかについての展開がなかつたとき、ろ中委の政治方針は空語に終り、政治方針と現実の党組織との乖離は、同盟を解体せしかねない危険を帯びていたのである。

同盟ろ中委は以上のような提議に表現された政治局の細統下のこの局面での限界に規定され、討論は一日で中断し、継続審議となつてしまつた。討論の中で提案を越えた向野提起がなされたか、たのも事実であり、破防法40条適用に対する斗いも管めて、現代革命の困難は謀略に接近しつつも、いまだ解決がなされなかつたのが、同盟全体の姿であつた。

赤軍派による党内斗争が開始されたのは、ろ中委以降である。赤軍派指導者の政治行動については後に詳述することとして、「現代革命ゆる」までの彼等の政治主張は、ろ中委提案の政治、軍事方針を極限化し、「前級前級」臨時革命政府樹立「世界革命戦争」として革命論にまでたかめて展開したものであり、政治局によるろ中委提案を越えに組織指がなされたのである。政治局はこの段階で、同盟の

を

